

植民地時代の香港におけるインフォーマリティのフォーマル化 ——スクワッティング、立ち退き、ジェントリフィケーション——

スマート アラン*

Alan SMART

Formalizing informality in colonial Hong Kong:
Squatting, displacement and gentrification

第9回連続ウェビナー 「包容力ある都市論研究会」
大阪市立大学 都市研究プラザ 2022年2月17日

冒頭の挨拶

水内: ただいま9時半を過ぎました。私、大阪市立大学の水内です。そろそろ始めたいと思いますがよろしいでしょうか。はい。あの参加者の方はまた、増えていくと思いますので、最初に簡単に水内の方から挨拶させていただきます。前回に引き続き、アラン・スマートさんに、レクチャーいただきますが、前回ちょっと所用で参加できませんでした。で、若干、簡単にアランさんのことを、私の思い出みたいなことちょっとだけ喋ります。アランさんとは、お付き合いは香港パプティスト大学のウィン・シン・タン先生から、1999年にアランさんのことを紹介されました。

ウィン・シン・タンさんとは1999年の1月に韓国の学会で初めてお会いしたんですけれども、確か、スマート、アランさんとはその年の10月かなんかに、もうすぐに大阪市立大学の国際シンポにお呼びしました。恥ずかしい事にアランさんからその事を指摘されるまで、1999年の国際シンポのこと、私は忘れておりました。先日、その話をしてる時に、アランさんの鮮明な記憶は、戎橋にあるケンタッキー・カーネルおじさんだったかな。その前で写真を撮ったことを鮮明に覚えてるという話でした。

ソウソーリー、グリコだ。グリコ！アランさん、これ正しいですか。

アラン: ミスタードーナツですね。当時、アメリカの「本当の飲茶」、餃子みたいなもの広告していたんですけれども、それを私の文化のグローバル化という教室で使えました、写真を。

水内: どうもありがとうございます。それ以来、時々

はいろいろなメールでやりとりしていたんですけども、今回また、こういう形でお招きすること大変嬉しく思っております。本日もよろしくお申し込み申し上げます。じゃあ、タミーさんお願いします。

タミー: 皆さん、こんにちは。タミー・ウオンです。URPの特別研究員で今日のセッションの進行役を務めたいと思います。

今回もウェビナーにアラン・スマート先生をお招きすることができ、嬉しく思います。また、アラン・スマート先生はカナダのカルガリー大学の人類学、考古学の名誉教授です。アラン先生の研究テーマは非常に広範に及んでおまして、政治、経済、都市人類学、法人類学です。アラン先生はこれまで数々の論文を執筆されておりますが、香港におけるスクワッティング、公営住宅、不法経済、都市経済、そして、香港から華南への投資に関する論文を数々書かれています。

また、先生は都市部における社会的排除と包摂性にも関心を持たれていて、本日は香港のスクワッター問題の文脈におけるジェントリフィケーションの概念について話されまして、そして、都市部の包摂性の意味合いを検討されます。それでは、先生お願いします。

研究課題の背景

アラン: 聞こえますか、皆さん。

どうも今回お招きいただきまして、大変感謝しております。そして、水内先生、タミーさんの方から過分なるご紹介を頂きまして、お礼申し上げたいと思います。水内先生がご紹介されました、あの会議

* カルガリー大学 名誉教授



図1 ダイヤモンドヒルのスクワッターエリア
著者撮影（1984年）

のことを非常に楽しい思い出であったということで、記憶しているんですけども、1999年の会議が日本において参加した初めての会議でした。で、今回残念なのはこの会議が終わった後にお酒を飲みに出かけることができない。皆さんにとっては朝の時間帯なんですけれども、セミナーの後にそういうことを、交流ができないのが残念だなと思ってます。

本日はジェントリフィケーションのペーパーも書いておりますので、それに関して講演をするようにというふうに、そもそもはお招きを受けたんです。しかし、それについてはズームのプレゼンテーションとするには、あまりにもこうビジュアルでなさすぎると思いましたので、そこで、今回はわたくしの近刊の本について話そうというふうに思っております（末尾・文献参照）。おそらく来年には香港大学プレスの方から発行される運びとなるわけですけども、後、最終的にまとめて、きちんとセットしたものを提出したりすればいいということまで進んでおります。

私たちがそれをやっているという、先ほどやってもいいという言葉を使ったんですけども、それはなぜかという、この論文に対して、コロナ禍が原因でありまして、私自身は、記録文書などの研究を、自ら出かけてすることができないということで、その部分をお願いした相手というのがおります。それがチャールズ・フォン（Charles Fung）さんということで、皆さんもご存知かもしれませんが、ロイ・タイ・ロック（Lui Tai-lok）先生の元教え子で、彼の方に、そのアーカイブの方の、リサーチをしてもらいました。しかし、彼の貢献というのは、ただ単に、ファイルを見つけてくれるというような作業だけではな

く、もっと大きな貢献をしてくれたということで、第二共著者として、彼の名前も含めることにしました。

ここにお見せしているのが、1984年に撮った、ダイヤモンドヒルのスクワッターエリアの写真（図1）で、当時わたくしが博士過程で研究するために調査して住んでいた所です。当時は、ここ、スクワッターとして5万人が住んでいるようなところでした。後ほどまた話しますが、手前の方にあるビルが再定住エステートということで、このスクワッター地区、エリアというものを一掃して撤収した後のために作られた再定住の区画です。その後さらに大規模な公営住宅の建設、左の真ん中あたりにある高層ですけれども、それが作られることになって、現在、香港の人口の45%がこういった公営住宅に入っています。

今書いている本ですけども、それは香港におけるインフォーマリティのフォーマル化ということで、このインフォーマリティが何を意味しているかということ、今からちょっとご説明します。インフォーマリティというのは、現行のルールや規則に従わない活動に関わっているけれども、モノやサービス、その他の慣習などが、本質的に違法であるわけではないということを意味しています。例えば、住宅を例にとってみると、その住宅というのは、もう完全に合法的なものであるけれども、しかし、その建設し、賃貸したり、売却したりというところで、合法的ではない形の行動が数々とられ得るということです。例えば、そのヘロインなどを含むような、もうそれ自体が違法であるというものも含まれます。

ということで、わたくしが博士過程の研究をしている1980年代初頭というのは、インフォーマリティ

というのは、非常に広範に広がっているものでした。スクワッターの数が、約70万人当時おりました。当時はどの道を見ても、営業許可を持っていない屋台とか、露天商などで、もう混雑してました。

ある意味私はラッキーだったんですけども、ちょうどこの研究をしている時期というのが、香港においてインフォーマリティから、それがフォーマル化されていくという丁度、その転換点、シフトする時期にあったからです。この点についてはまたあとで戻って、お話をしますけれども、そもそも、このペーパーについて話をして欲しいという依頼されましたので、ちょっと説明しておきます。これはジェントリフィケーションについて出したペーパーでした。それはそもそも、デイビッド・レイ (David Ley) が書いたことについての、わたくしからのリ spons ということですよ。

ここに書いてますようにジョセフィン・スマート (Josephine Smart) とわたくしのほうが展開している議論というのは、このジェントリフィケーションという、説明するためのその概念というものが、あまりにも拡大されてしまったということをお話します。デイビッド・レイが言ったのは、ジェントリフィケーションという言葉が全く使われていないので、香港における都市研究というのは、まだまだ未発見のものである、という彼の発言に対するものです。で、もともと、このジェントリフィケーションという言葉は、ロンドンで研究され始めて、その状況を示すために、ルース・グラス (Ruth Glass) が使った言葉なんですけれども、貧しい人たちが住んでいる地域エリアにおいて、より、金持ちの人たちが、その土地で物件を買おうと、その結果、その価格が上昇してしまうので、もうその貧困者たちはその地域には住むことができなくなった、という状況を示すための言葉でした。レント・ギャップというふうに、ニール・スミス (Neil Smith) が呼んだような変化を説明するための、非常に具体的なメカニズムだったわけです。

しかしながら、今日ではジェントリフィケーションという言葉を使うことで、何らかのその都市の理解に偏りが生じて、その結果、そこでの地価とか物件の価値が上昇してしまって、元々住んでいた人たちを立ち退かせるような状況がある場合に、この言葉が常に使われるようになりました。例えば、政府が介入してきて、都市部の再興として、今ある建物を全部取り壊して、新しいアパートや商業センターを作ったりする、というような状況でも使われたりします。

しかし、このような場合においては、もはや一つの単一のメカニズムだけで起こっているということではなく、複数のメカニズムが同時進行的に起こって発生している現象であるとして説明をしなければなりません。したがって、この拡大解釈されているジェントリフィケーションという言葉でもって、あまり他に注目を浴びていないような分析アプローチが、貧しい人たちの立ち退きという言葉で追いやられてしまったわけです。

香港でその立ち退きについて全然語られなかったというわけではなくて、ジェントリフィケーションという言葉が使われなかった理由というのは、その香港固有のローカルな、いろいろな事情とか表現があるからです。例えば、スクワッター再定住とか再開発とか都市部のリニューアルというような事情、状況がローカルにあるからです。

SOS 調査はなぜ 1984 年以降実施され始めたのか？

残りのプレゼンテーションにおきましては、1982 年以来、私が研究調査をしてきた、その一番よくわかっている貧しい人たちに関する立ち退きの一つに焦点を当てて、お話しをしていきたいと思っております。で、こういったプロセスが、時間をかけて、どのように展開して行くかということをお話することによって、何か得るものはないかということ、お話しをして行きたいと思っております。

香港の歴史を振り返ってみても、この何十万人というこのスクワッターエリアに住んできたような人たちについては、ほとんど語られていないということがあります。しかしながら、現代的な香港の景観とか、社会の形成にスクワッティングと、この再定住というのは大いに影響をしてくれました。で、2006 年の私が執筆した著書におきまして言っているのは、この事業が、ポリティックス、地政学ということによって、スクワッターのクリアランス、一掃するということが説明されていて、なぜスクワッタークリアランスというのが、1954年に再定住になって、そこから非常に大規模な公共住宅計画につながっていったのかということをお話しています。

その再定住を用意しないで、クリアランスするということはスクワッター自身の抵抗を招き、また、中国本土からの介入を招きました。このような時代には、香港というのは外交的に非常に不安定な状況

にありました。こういった抑圧的な政策によって、対立が発生するという事は、その後、外交関係を、さらに不安定化させるような状況を生みかねない。この共産中国の端っこにあるこの植民地の現状を変えてしまう可能性があるという懸念がありました。このような再定住というのが、公共住宅のプログラムにつながっていったわけですけれども、私自身は香港において、この公的住宅、公営住宅の影響を理解することなしに、考えることなしに、今の香港をどの側面でも理解することはできないというふうに強く感じています。

1842年以降、スクワッターというものは香港に存在してはいたけれども、第二次世界大戦後になるまでは、その人口はとても少なかったです。今、写真を数枚お見せしていますが、1932年、63年のスクワッターエリアの写真、そして、その後にもわたくしが博士過程の調査をしていた時期の、スクワッターの写真があります（以下、このパートの説明に使った一連の写真は、著作権が確認できないなどの理由で、本論考には掲載していません）。で、これが私の若い時のバージョンの写真なんですけれども、腕に抱えているのは、私のリサーチアシスタントでこの全然知らない国から来た人がスクワッターに話しかけるのを非常に円滑に支援してくれた、アシスタントの六ヶ月になる娘さんです。

なぜこのダイヤモンドヒルを選んだかという、私の博士課程の調査をしている最中に、クリアランスが進行するだろうというふうに思ったので、そこを選びました。多くの人たちはもう香港にはスクワッターはいないというふうに思っているようですが、確かにその都市中心部からは消えてしまいました。それでも、まだ1万人ぐらいのスクワッターはまだ今でも残っていて、この二つの写真が牛池湾（ノウ・チー・ワン）と、Chuk Yuen Heung（チュ・イェン・ヘン）というところで、今、スクワッターエリアのクラスターとして、まだ残って現存している二つの地域です。

しかし、もっと正確な数字を言うと、このスクワッターのこういった建物にまだ住んでいる人が20万人以上いるのではないかと、そのほとんどは、新界出身の人たちだと言われています。で、このように香港でスクワッティングの問題がまだまだ根強く残っているというのは、非常に興味深いことだというふうに思います。つまり、その植民地政府というのが、それほど厳しい政治にさらされていなかったということも示しているかもしれないし、また、その、一掃したスクワッターたちをリハウスするため

に、たくさんのリソースをつぎ込んできたにもかかわらず、解決されていなかった、ということは興味深いと思います。

ここでメタファーを使いたいですけれども、スクワッターの問題というのは、このようにすごいゴムの硬いしっかりとした風船のようなものであると、このギュッと絞って、もう一つのところが膨らんだとしても、また、一つのところが絞ったとしても、別のところが膨らむ。でも弾けはしないというような風船だと思います。従って、その風船内の圧力ってというのは、そのときの条件付けをするような環境によって発生しているんだと思います。その主要な要因というのは、まず一つには、その住宅が不足しているということ。つまり、手頃な住宅が不足しています。世界でも、今日、香港の住宅というのは最も手が出ない、非常に高いものとなっています。中国本土からの移民増ということが二番目の問題で、1945年当時の中国からの移民は大体50万人、1984年には500万人になってました。

最後の問題は、政府が不動産ベースの収入に依存していたということです。香港における、すべての土地は政府所有ということであるということ、そして、私有地に関してはリースしかできません。

香港においては、このスクワッターの問題を解決しよう、少なくともこれ以上膨らまさないということで、数々の複雑な、また、長い歴史が存在するわけなんですけれども、移民の数も増えてきたということで、その結果、きちんとコントロールをしていなかった地域においては、スクワッターの問題が再び浮上してきました。この新しいスクワッティングをコントロールできなかった一つの要因は、政府の慣習的なやり方っていうのがあって、それはスクワッター自身に注目するのではなくて、定期的な調査をするにしても、その建物とか住居のみを調査し、その存在を容認するという政府のやり方に一因がありました。

その結果、非常に画期的な、また、非常に普通ではない、スクワッター物件市場というものが生まれてしまいました。しかし、これは、政府は認めたものではありません。つまり、政府にとっては土地というのは、住むことはできても、それを売却することはできない。売り買いすることはできないんですけれども、実際には多くの人たちが売り買いしていました。しかしながら、これが幸いなことに、偶然なんですけれども、わたくしが博士課程の、その調査をしているときに、スクワッター・オキュパンシー、サーベイ (Squatter Occupancy Survey、略して

SOS)という形で変化しました。こういったサーベイが始まってからは、その、調査に登録した人だけが、公共住宅への恒久的な再定住の有資格者となりました。

今示したところが仮設住宅なんですけれども、先ほど言ったように、再定住の有資格者とならなかった人たち、残る人たちは良くてもこういった仮設住宅しかもらえませんでした。それも自分がホームレスであるということを純粹に証明することができればです。

それでは、なぜこのスクワッター問題に区切りをつける、それを終わらせるということがそれほど重要だったのでしょうか。これは、ネスト・ジョイと書いた前の本の中で、わたくしがこのラチェット・オブ・エクスクルージョン、排除の歯止めというふうによんだものです。このSOSを行うと、そうするとその効果としては、政策の変更をしない限り公共住宅の有資格者となる、その定住者となる事が出来るスクワッターの数というのは、決して増えはせず、ただ、単に減ってくるというだけです。このラチェットをこの歯止め、皆さんもご存知だと思うんですけども、この道具というのはこうグツと締めていくと一方向にしか回らなくて、いったんもうぐつと締めると、もうそれを緩める事は出来ないというものです。

これがその、その居住者の登録の書式の一つの例です。二つの効果というものが、これで生まれました。一つは、多くの人たちが公営住宅に入れるという希望を持ってスクワッター地域に流入していたわけですけども、スクワッター地域に対するダイヤモンド、需要が減ることに貢献しました。したがって、非常にこのスクワッターの問題に対して、コントロールをして監視をするということを強くしたら、新たなスクワッチングの問題は終わるはずであるということです。

もう一つの説明を求めて

わたくしの、今回の本のために行っているリサーチですけども、これはイギリスにおけます、30年の記録文書ルールというその特徴に基づいています。このリサーチは、そもそも、私とその博士課程の研究をしている頃に求めていた、そのファイル、文書というものが、30年経って2012年にそれが公開されるに至ったわけです。で、このファイル類に關しまして、私は非常にわくわくしてきました。というのは、当時現場で、そのリサーチをしていた時に

見れるものと見れないものがあつたと言う、この二つの種類のファイルについて、やっと両方つき合わせて見ることができるようになったからです。

2, 3の、そのペーパーを出しまして、そこで、詳述して作業仮説というものがあります。まず英中の共同宣言というもののが1984年に署名されました。で、この共同宣言というのは、1997年に香港を中国に返還することに関する宣言です。今までスクワッターの問題を解決することができなかった、それはロンドンと北京の間に緊張関係があつたからだという、そういう時の文脈において、これが署名をされたということは、そういうふうな地政学的な制約がこれによって取り除かれたというふうに考えることもできます。で、そこで、私は当初の段階ではその文献の中に、決定的なその証拠を見出すことができるんじゃないかと期待していました。そこで、例えば、文書として今や中国政府、北京は英国政府や香港と社会の安定という利益を共有しているのだから、やっとこれでスクワッターの問題を解決することが出来る。誰もこんな船をひっくり返すようなことは望まないだろう、というようなことを記載した文書が見つかるんじゃないかなと思ってました。

しかしながら、数年かけてこの保管資料の調査を行いましたけれども、もう後半に行ったんですが、そのような文書を見いだすことはできませんでした。しかし、このような証拠が見つからないということで、これが一つのチャレンジになったわけです。でも、依然として、わたくしは以前だったら行なうことが難しかったことが、この地政学的な変化によって、可能になったかもしれないということについてはいまだに信じてますけれども、それを裏付けるものはありません。だからこそ、これが誰もまだペーパーには書いていないような、背景にある理解なんだと思います。

もう一つの可能性が生まれてきました。それはこのように、もう決定的な証拠を示すような文書というのが、1997年の前に、もう消されてしまっていたかもしれないということです。多くの歴史家、また、イアン・コーバンというジャーナリストも含めてですけども、この植民地政府の文書、ファイルというのが、この返還前に広範にわたって廃棄されていた可能性があるということを示唆しています。依然としてこれが回答かもしれないんですけども、じゃあ、それをどのように立証するかと言う問題があります。この地政学の説明を採用するためには、それがほかの競合する説明よりも、優れているってことを示さなければなりません。これまで誰もこう

いった説明について提供してくれていないし、このスクワッターを基盤としたSOS調査について、これまで書いているのは私だけです。それで、私たちは自ら大体の説明を見つけることにとりかかりました。

イギリス政府の役割

今回、書く本についてですけれども、私たちはその他の可能な説明というものをいろいろ検証して行きました。残りのプレゼンテーションで、それを一つずつ見て行きたいと思います。当時の香港で何が起こっていたかということ、それを使って説明を少しでもして行きたいと思います。

いろいろなピースをここからこう集めて、一つにまとめていかななくちゃいけないんですけれども、SOSの期限ということで1970年まで遡ります。当時の総督がデイヴィッド・トレンチだったんですけれども、彼がスクワッターの問題について、その、シニアポリシーアドバイザーに対して懸念を表明しております。特に開発に必要でない地域のスクワッターエリアの状況に関してふれています。そもそも、このような政策議論、論議というのが、なぜ生まれてきたかということ、英国からの質問が元になりました。つまり、その質問は、当時の首相のエドワードヒース首相と当時の外相から提起された質問です。

この、時のイギリス政府というのは、野党、あるいは、メディアの方からプレッシャーをかけられていました。特に香港の状況について、スクワッター問題についてプレッシャーをかけられていました。このロンドンからの介入というのが、我々がその、求めている説明の一つとなるかもしれません。

ロンドンからの介入、また、これについても、私たちが文章を、もう慎重に注意深く読んでいって、わかってきたんですけれども、それは何かというと、このロンドンからの介入があったので、香港の総督、あるいは、香港の人々もこのスクワッターの問題に何らかの手を打つ必要が出てきたけれども、そこでとられた措置というのは、あくまでも地元香港での、*preference*選好とか、そこでの審議にもとづいてとられた措置でありましたということで、結局ロンドンが言ってきたことについては脇に追いやられて、追いやることは簡単であった。なぜならば、ロンドンがプレスなどから批判されないということだけを目的としていて、真に問題を解決するために別にそのコストの負担をしたりというようなことはし

なかったわけです。ロンドンからの介入ということ、やっとボールが転がり始めたのかもしれないけれども、その解決の仕方とかいうような具体的なことは、他に説明を求めなければなりません。

この開発に必要な土地におけるスクワッターの問題を解決するというのは、スクワッタークリアランスというのは、その主眼点となっているのが開発ということであつたことを忘れてはなりません。この、スクワッターエリアを一掃した目的というのは、主に政府が開発のための土地を確保しなかったからということです。しかしながら、ロンドンには、このスクワッターの地域というのが汚くて、それが目障りであるという懸念を持っていたのだけれども、そういったロンドン側の懸念には標準的な手順では対応できませんでした。

一番その問題が大きいようなエリアというのは、開発に使うことができないような、この非常に急峻な坂の所に出来ているエリアです。トレンチ総督は、そこで二つのオプションを提案いたしました。一つはまず、その開発に必要な土地ではなくて、まず最初に、すべてのスクワッターを再定住させようということを行いました。もう一つの案というのは何らかの形でその合法化をするということです。つまり、このスクワッターエリアをフォーマル化すること、これを合法的なプロパティにするということです。

そして、興味深いのは、このように非常にパワフルな権力を持った総督であるにも拘らず、彼が提起したことはどちらも支持されずに、当初の政策議論の中で両方とも落とされてしまった、脇に追いやられてしまったということです。で、その代わりに、第三の案としてこのスクワッターエリアのインブループメント、改善案というのが結局採用されました。

ポリシーマングルアプローチ (policy mangle approach) について

このようにびっくりするようなプロセスがあつたあと、そのあとに私が思いついたエクスプラネーションというのは、ポリシーマングルアプローチと呼ぶものです。マングルというのは、古い機械で、つまり、当時は洗濯の時の乾燥機がまだなかったので、洗濯機から出して、それをこの間に服を入れてくるくる回して絞るという洗濯の絞り器です。ポリシーマングルアプローチというものを使うことに

よって、この新たなスクワッティングがどのようにして、いつ終わったかということの一つの説明になり得る、そういった理解を説明し、助けてくれます。そして、政策の決定の偶発性というものの重要性がわかります。

このような意思決定、政策決定というのが、私がポリシーマングルと呼ぶものを通じてなされると。で、そこには例えば、ワーキングパーティーとか、作業部会とか、委員会とか、報告書とか、調査とか、そういうものが相混ざって意思決定されるということです。そのマングルっていうのが機能しているときに、ちょうどそのときに、色々な複数の問題とか懸念というもので、緊急性の高いものがもう複数存在していたわけです。どのようなその勧誘が、より実際現実的であって、より望ましいかということを決断するにあたっての文脈的な影響を、その当時の数々の懸念というものが作っていきます。

同じような技術なんですけれども、この政策のメタファーに関しては、より上手く説明がつきやすいのは、このソーセージをミンチにする、お肉をミンチにしてソーセージを作るための機械です。ビスマルクが言った有名な言葉があって、もし法律とかそう、あるいは、ソーセージが好きだったら、それがどう作られたかということは知らないほうがいいよと言うことです。つまり、非常にこのぐちゃぐちゃになっているので、出来上がって出てきたお肉っていうのは、もう何が中に入ってるかわかんないごちゃ混ぜになっているようなものであるということです。

需給のインバランスという説

この文献調査から出てきた次の説明というのが、需給のインバランスという説明です。で、マクレホース総督が非常に野心的な10年間の住宅目標というものを1972年に作りました。その目標の中で最優先目標として掲げられたのが、すべてのスクワッターを一掃するという事、そして、ライセンスドエリアと書いておりますけれども、これは先ほど説明した、仮設住宅のエリアというふうに解釈してもらっているのですが、それらをすべて一掃するということが第一目標でした。もちろんこの目標は達成することができず、失敗に終わったわけで、1982年の段階で、最高レベルの75万人というスクワッターの数に膨れ上がりました。

これは非常に複雑な話ではあるんですけれども、先ほど例で示したスクワッターの風船の話でこちら

を潰しても向こうが膨らむというような状況でした。しかしながら、非常に大規模な形で公共住宅、公営住宅は増えてきました。で、この10年間の間、280万人の人たちのために住居を用意するという目標に関して最大の障害となったのが、開発のためにスクワッターエリアをクリアランスしなければならないということでした。で、このクリアランスをするということは、その後再定住できる場所をきちんと用意しなければならないということですけれども、しかし、ほとんどの人たちが、公共住宅に恒久的に入るような資格を持っていませんでした。で、その結果として、仮設住宅が不足をしてきてしまった。それが、この急速にクリアランスをして行くことの障害となりました。

結局非常に複雑な状況を生んでしまいました。で、多くの膨大な文章がこれについてはあって、需給のインバランスということは、非常に語られているんですけれども、恒久的な公共住宅を作りたいけれども、それをするためには、まずスクワッター地域のクリアランスをしなければならない。で、仮設住宅というのは非常に低密度であるので、たくさんの土地を必要とすると。で、そのスペースの空間の割り当て、ロケーションも非常に少ないということで、結果的には非常に複雑な問題が発生して、なかなか計画が前に進まないという状況になりました。

最も簡単な解決方法というのは、より多くのスクワッターを、仮設住宅向けではなく、より恒久的な住宅には入れるような資格を与えるということです。ある程度これはうまくいったんですけども、新しい問題も発生しました。まず一つに、多くのスクワッターたちが公営住宅に入りたいたので、逆にスクワッターの数が増えてきました。より多くのスクワッターをより包摂的にすると言うこの問題によって、もう一つの新しい問題が生まれました。

逆差別という要因

この期間、マクレホース総督の時代ですけれども、焦点が当てられていたのは、政府を支持してくれるような、より忠実な、政府に忠誠を誓ってくれるような、香港人をたくさん生みたいというところに力点がおかれていました。1966年と67年の暴動を見ると、これはその政府が中国の人たちとあまり親しくない、支持をされていないということを示しています。マクレホース総督は当時、北京政府の方と香港の将来について交渉をしているときでした。

この住宅計画というのは、その人々からのコミットメントとか、ロイヤルティーという感覚を作り出すというためになされていたわけです。しかしながら、この建設していく公営住宅のほとんどが、この10年計画の下でスクワッターに割り当てられてしまう。それは、その後、中国の移民も増えてきて、中国の移民もそこに入ってくるということになると、もともとと香港に住んでいる地元の人たちの中で、不公平感に関する不満というものが高まってきました。

香港が中国本土とは違う、「香港」というアイデンティティが作られるには、いろいろなファクターがあるんですけども、この時期、非常に大きかった要素で表面化してきたのは、やはり香港の人たち自身が中国からの移民ではなく、自分たちが公営住宅に入る権利を持つべきであるというふうな、感覚が広がってきたことです。

ここには二つのチャレンジがあるわけですけど、まずその需給問題というのがあったので、それを解決しようとする、今度は非常に不公平感とか緊張感というものを生んでしまった。で、そこで、スクワッター地域をもう一掃すると、みんな追い出すということよりも、むしろ再定住をその遅らせるという方に力点が移っていき、で、同時に、そのPR上、批判を買うようなスクワッター地域のひどい状況について、ロンドンが懸念を持っているので、それにも同時に対応しなければならないと言う状況です。

スクワッター地区の改善説

この限られた期間の中で全てのスクワッターを再定住させるということになると、一般の人たち、スクワッターでない人たちは長いそのウエイティングリストというものに参加をしなければならず、この供給不十分の公共住宅へのアクセスが益々なくなってしまうという状況を産みました。スクワッター地域についてそれを解決しようとする、開発に必要なでない土地に再定住をさせなければならないというニーズも高まってくるという難しい状況でした。

このスクワッターエリアのインブルーメントプログラムというのは、1982年に始まったんですけども、実際にはインフラを更新して行く。例えば、この電線を通して電力化を進めるというようなことは、70年代初頭から始まっていました。で、極端な例としては、この、違法の電力供給という事例がありまして、再定住地区からスクワッターエリアにこ

のメインの道を使って電力を違法に送ることもままありました。

この植民地政府にとっては伝統的な、改善をしていくというようなその慣習というか、努力がなされていたわけで、例えば、タニー・アリーやジェームス・ポットが言っていることは、植民地化というのは、その入っていた地域を改善して行って、その土地の人たちが自治を取めることができるようになるまで改善をするということで、植民地化というのは正当化することができるというふうにしています。

また、このスクワッターエリアを改善したいというふうに、香港政府が思っていたということを示す証拠というのはたくさんあります。しかし、根本的な願望というのは、その現存するスクワッターエリアそのものを改善して行くというよりも、あくまでも取り壊したりする(スクワッターの人たちを)再居住していくということが中心的でした。

そこで、インブルーメントというのは、あくまでもリソースが十分に取れるまでの繋ぎ策、引き延ばし策というふうな形で使われていました。しかしながら、こういった努力は失敗に終わりました。というのは、特に地滑りとか火災が起こった後に出てきた報告書を見てみると、特に危険な斜面にあるようなスクワッターエリアをより安全にしようと思って、改善をする、改良するというのは非常にコストがかかることが報告書で示されました。

そのようなディザスター、災害、大災難があったので、それによって1980年代初頭、あるいは、その以前から、仮設住宅不足というものがますます深刻化してきました。で、その結果、1984年にこのインブルーメントプログラムというのは、段階的に廃止をするという決定がなされて、その代わりに、1970年にトレンチ総督が示したオプションの一つであるところの、全ての一掃されたスクワッターを再定住させることにコミットするということになりました。

再定住と SOS 調査

従って、1984年の段階では、スクワッター問題を解決するためのほかの代替的なソリューションというのはすべて失敗したか、あるいは、現実的ではないというふうに見なされていました。しかしながら、その開発用ではないゾーンからスクワッターを再定住させるという決定というのが、唯一の可能なオプションであるというふうに見られるようになりました。

しかし、すべてのスクワッターを再定住させるというのは、もし、新たなスクワッティングというのが続いている限りにおいては、そのような再定住させるというのは非現実的でコストがかかりすぎるというふうに思われました。例えば、ボートを、船を救おうとしても傾き、結局、どんどん新しい水が入ってくるのであるならば、結局救えないということと同じです。そこで、最終的にこうやってスクワッターと、サーベイSOSというのがここに入ってきます。

この再定住のコミットメントを拡大して行く際の、最大のリスクの一つに蓋をすることがSOS調査で可能です。結局、前の決定から、もうこれは明らかかなことであつたんですけども、それがわかるようになるためには非常に多くの時間がかかりました。で、結局はいろいろなほかのスクワッターのコントロールの措置も取りながら、このSOS調査に登録をするということを、公共住宅に定住できる一つの要件にすることが新しいスクワッティングを終焉させるための鍵であつたわけです。それが結局、1984年に起こつたことです。

今日は時間が限られているので、すべて説明できないんですけども、それぞれの説明とかプロセスに関しては、その背景には非常に複雑で、また色彩豊かなストーリーがそれぞれあります。でも、説明できません。

結論

結論としては、まず一点目が、今回の本で展開して評価しているもっともらしい説明、いくつかの説明がありますけれども、それらはSOS調査の採用と新しいスクワッティングの終焉を説明するには、どれ一つもそれだけでは不十分です。そうではなくて、それぞれの説明が良くても、スクワッター問題に対処するための取り組みの複雑な道筋の一部しか説明していません。実証的な証拠を見ると、それは需給インバランスによる説明を最もよく裏付けているようですし、また、この需給インバランスが1970年代の決定に大きな影響を及ぼして、フォーマル化への道筋を付けたようです。

1970年代の初頭に排除政策というものがとられて、その仮設住宅不足を説明するためには、このインバランスが重要になってきます。しかし、この需給バランスっていうことをインバランスというものを説明しようとすると、他の要素にも目を向けないと説明することができません。例えば、その不公平

を監視する懸念の高まりとか、長期在住者に公共住宅をよりよく割り当てたこと、そういった要素も検討する必要があります。さらに開発に不要な跡地にすべてのスクワッターを再定住させる事が唯一可能な方法であることが明らかになったわけです。というのは、そのスクワッター地域というものを安全に、また、衛生的にしようということは非常にコストがかかるからです。

皆さん、立ち退きというふうな概念を最初にも言ったんですけども、それをまだ覚えてくださっていただければというふうに思います。つまり、このインクルージョンとか、エクスクルージョンとか、包摂とか、排除のメカニズムなどについて最初にも触れたんですけども、特に強調したいのはジェントリフィケーションという言葉だけでもって、今回のケースにそれを当てはめたとしても、すべてのことを説明することができない。そこにはこの包摂というメカニズムで働いている個別具体的な力学というものがあります。スクワッターについてのその調査を行い、それを容認し、そして、公的、公営住宅については資格をあまり与えようとするというように力学が働いたり、また、そのスクワッターを公営住宅に入れようとするが、あまり、この地元の人たちの中で、不公平感とか、自分たちが不遇を食らっているというような気持ちが発生してしまう。公営住宅に入ろうとすると、スクワッターでなければ、7年も10年も待たなければならないと言う事の、そのトレードオフも存在しました。

そういうことで、インクルードと言っても、じゃあ、誰を包摂するのか、誰を含めるのか、という問題もあるので、ここでやはり実証的なプロセスを見ながら見ていかなければ、このジェントリフィケーションという言葉だけを使っていたのでは全てが曖昧になる、よく見えなくなってしまうということだというふうに思います。今日お話したかったプレゼンテーションは以上なんですけれども、十分なディスカッションの時間を残すことができよかったと思います。質疑応答、そして、もう少し説明が足りなかったところなどについて質問をお受けして行きたいと思います。ありがとうございました。

質疑応答

タミー：プレゼンテーションをアラン先生ありがとうございました。確かにこの都市の研究については、居住権について、やはり議論することは重要だと思

います。確かに特に香港に関しては、その全てのことをジェントリフィケーションという言葉で見るとはならず、他の考え方というのが重要になってきます。

特に先生が使った、ポリシーマングルという用語なんですけれども、この考え方は特にこの香港のケースにとっては、重要だというふうに思います。香港の非常にローカルな、複雑な文脈というのがあって、香港がインフォーマルからフォーマル化して行くという過程において、非常に大事な概念だと思っています。

特にリサーチャーにとっても、研究者にとっても、学生にとっても重要な点があって、それを最後に述べたいのですが、確かに昨今グローバル化ということで、すべてのことが同じになっていくという状況でありますけれども、それと同時に、それぞれのローカルにおいては、同時進行的なプロセスというのがグローバル化だけでなく、ローカルなプロセスというのがあるので、それらが合体することによって違いを生んでいくんだと思います。

香港人と致しまして、本当に、今やってらっしゃる先生の研究は素晴らしいと思いますし、今、今後進行していく研究から出てくるものを楽しみにしています。

それでは、質疑応答の時間に入りたいのですが、質問、コメントなんでも結構です。方法論に関するご質問とかでもいいと思いますし、チャットボックスを使って質問していただくか、あるいは、挙手していただければと思います。

アラン：タミーさん、ありがとうございます。香港以外のことでもいいと思うんですけれども、それに関連したこと、類似した質問とか、また、ディスプレイメントについてもいかがでしょうか。どのような質問でも。

コルナトウスキ：質問じゃあ、私の方からさせていただきたいというふうに思います。質問を簡潔にするためにどうしたらいいかまだ思案中なんですけれども、そのジェントリフィケーションという話をする時に、いつも一つの意味合いを考えなくちゃいけない、それは土地というものは評価しないといけません。これは資本の蓄積ということで、非常に経済的な作業ですが、その評価が必要です。

土地に関しまして、開発の為に取っておかなければならないような土地の必要性があるという話をした、されたんですけれども、特に、斜面の地域、ス

ロープのところとかは、開発にもなかなか簡単に使うことができないと。そういう意味で政府としてはその土地を有効利用したいというような、経済的な、至上命令というか、必然性があるということも分かります。

次に質問なんですけれども、このジェントリフィケーションというものを、ネオリベラルな現象として捉えるというようなアナロジーもあるかと思いません。あとは、時間軸なんですけれども、先生が焦点を当てているのが80年代初頭、特に1984年のことだったんですが、ちょうどその時というのは、中国が国境を開放して外国からの投資を誘致しようという事をし始めたときで、そして、こぞって先進国が投資を始めました。丁度その時香港も、工業中心型から、金融サービス業に移行をするという経済の、もう、転換点でした。もちろん、それを見てこれがネオリベラリズムへのシフトというふうには言わないんですけれども、でも、その土地というのが、その経済ドライバーとしてより重要になってきました。

そこで質問なんですけれども、香港がだんだん金融サービス中心型の経済に移行をして行く中で、例えば、その他の経済ステークホルダー、不動産業者などから、土地からもっと利益をあげたいというようなそのプレッシャーがかかっていたのではないかなというふうな、その文献調査をした段階で、それを示唆するような資料とかはあったでしょうか？というのはい日いただいたお話の中で、中心的なステークホルダーとしては唯一政府の話しかなかったの。

アラン：いやいや、非常に良い質問です。どうもありがとうございます。まず、認識すべき重要な点というのは、不動産開発に関しては、政府こそが中心的なプレイヤーである、ということです。というのは、中国と同様に、土地はすべて政府の土地であるからです。で、中国においても、不動産開発が中心になって、開発がされていたわけなんですけれども、それと似通ったところがあって、前の本にも書いたんですけれども、香港の場合には、政府のレベニューの中心が不動産開発であるということ、そして、開発のレジームそのものが、プロパティ主導型、不動産主導であるということです。で、おそらく最もこれに似ているシステムというのが、シンガポールではないかというふうに思います。

香港というのはネオリベラリズムではない、というふうに思いますし、これ原始的リベラリズム(paleoliberalism)リベラリズムかもしれません。つまり、常にいつもリベラリズムであったということ

です。例外は、住宅に関してそうであったと思いませんけれども、福祉国家ではなかったということ、そういうことで全く別のダイナミズムが力学的に働いているというふうに思います。で、次にビジネスの利害ということですが、政府の出しているアーカイブによると、このビジネスというの、このプロセスのドライバーではなかったというふうに思います。

政府の仕事というのもの、ビジネスのためにやっているところがあって、土地を確保しても、それもビジネスのために、というところがありました。このスクワッターの土地を一扫して再定住するために、土地を確保して行っても、その多くが民間企業のために使われています。D・W・ドラカキス・スミス (David Drakakis-Smith) が計算しているように、一扫して確保したスクワッターの土地の3分の1しか、結局、再定住には使われていなくて、残りの3分の2が一部、政府の施設に使われているけれども、その多くが競売で、民間企業に提供されていると。そういうことで政府と企業の間には共有する利益、利害の共有というのがありました。

つまり、政府と大企業、特にこの大企業と言った場合には、イギリスの、英国の大企業、そこには利益が共有されていました。で、重要な決定というのは、エグゼクティブカウンシルっていうところで、だいたいなされまして、そこに入っているのは総督と、政府のトップの人たちと、ビジネス界の代表であります。そこで、ビジネス界と産業のつながりっていうのが、そこにあるわけです。例えば、スクワッターの問題というのは、少なくとも記録文書を見る限りにおいては、ビジネスにとっては、それほど重要な問題ではありませんでした。

質問された点で面白かったのは、例えば、1984年というのが脱工業化ということで、香港から中国本土に対しても、投資が向かっていった時期であるということなんですが、しかしながら、それについては、その証拠というものは見つけれられておりません。スクワッターの問題を終わらせたいという願望がありました。それは恐らくイメージ的なものではないかというふうに思います。香港がワールドクラスの街に見せたいというイメージということで、主にその金融都市に生まれ変わっていくために、あまりこう見かけが良くないと、あんまりにも例えば、ビジネスセンターの近くにスクワッターエリアというものがたくさん存在すると、イメージとして、外資系の金融機関が、そういうものはあまり良しとしないだろうということがあったというふうに思います。

ジオポリティックスというのもの、やはりここへ入ってくると思うのですが、それは文脈的な一つの要素として使うことはできると思いますが、それが政策論議の中に入ってきたというような裏付けは、見ることはできません。ひょっとしたら脇に追いやられていたとか、傍流としてはあったかもしれないけれども、なかなかそれを、文献を見る限りにおいては、見つけることができませんので、今後フォローアップしなければならない視点だというふうにも思います。

コロナトウスキ:アラン、ありがとうございます。

タミー:他に質問ありますか？

じゃあ、私の方から。まず、アランの研究というのは、植民地時代の香港を理解する上で非常に重要だと思います。特にその居住権とかスクワッターの話、そして、公営住宅、そして、より広範な住宅ということについて理解するために重要だと思います。それが今日の香港の状況をどう形づくって来たかということを理解する上で重要だと思います。

最初の質問なんですけれども、香港にとっての植民地主義ということで、意味合いがなんであったのか。香港における、この植民地支配の特徴、本質ってものをどのように定義づけていらっしゃるのか？ 1997年に香港が中国に主権を返還して以降においても、香港は金融のグローバルシティであり続けているように見えますけれども、その基調のところ、具体的に政府とビジネスの関係というものが、新たな植民地化というような状況を生み出しているんでしょうか？ 非常に複雑なプロセスだと思うんですけども、1997年以降の10年間か15年間ぐらいに渡って色々な文献を見たり、経験とか観察などを通じて、香港においても依然として、この植民地化というものが続いているんでしょうか？

アラン:あの、あんまり複雑な事ではないと思います。香港における植民地主義というのは、その非常にベーシックなものであったというふうに思います。植民地主義についても、いろいろなパターンがあると思いますが、その議論にまでは行って行きたくはないんですけども、中国の一部をこのようにイギリスが、英国が19世紀に主権を取ったと。そして、そこで、イギリスの政府と企業の間、企業のその利益に則った形で香港というものを運営して行きました。有名なレッセフェール、自由放任主義というのが、経済についてもありますけれども、その

自由というのは中小企業とかではなくて、むしろ英国の大手の商社にとっての自由というところで、そこで、ユーティリティモノポリーというものが生まれて、競争というものが発生しないという状況です。

1967年以降になって、やっと、植民地政府は香港の地元の声に耳を傾けるようになってはきましたけれども、それも、中国とイギリスの経済エリートに耳を傾けていたという状況ですので、これはいわゆる古いタイプの、昔ながらのコロニー、植民地であったというふうに思います。こうメンタリティーの部分にまで、どのぐらいその浸透していたかということについては、いろいろな研究の仕方があると思いますけれども、この香港におけるイギリスの植民地主義というのは、それほど複雑なものではなかったというふうに思います。

実際全ての今の、現代の香港の政治的な状況についてお話をするのは複雑すぎるので、時間がなくて、やめたいと思いますけれども、こういったプロセスは今も、継続しているかどうかということに対する質問の答えですが、この少なくとも住宅、住居という分野におけるインフォーマティリティという状況は続いているというふうに思います。スクワッシングというのは、もはやオプションではなくなりましたが、サブディバイドユニットというような、間仕切りアパートというような形で、まだ残っているというふうに思います。

でも、この残念なのは、その一部のストーリーとして、インフォーマリティに対して、だんだんその転換点が現れた、状況が変わってきたということが残念に思います。中国において普通の人々が、非常に抑圧的な状況に対応するために、自分たちが使ってきたリソースというものがだんだん、弱体化しているところなんです。つまり、自分たちの生活の糧をなんとか見つけて住むところも見つけていくというような、彼らのそのリソースっていうものが、抑圧される中でだんだん搾り取られている、なくなっているというふうに思います。スクワッシングというのは、やはりソーシャルモビリティの可能性を提供するものであると思いますが、私自身、多くの著名な学者にも会ってききましたが、そういった学者の人たちが、私は若い時にはこのようなハウジングエステートに住んでいたとか、スクワッターエリアに住んでいて、その後、再定住地に行ったというような人たちにも会ってききました。けれども、ある意味インフォーマリティというのが、彼らの単なる生き延びていく生存のためだけではなく、彼らが繁栄して行くためにも、貢献をしてきたん

じゃないのかなというふうに思うわけです。

ひょっとしたら私は間違っているかもしれませんがけれども、1997年以降を彼らのこのようにインフォーマリティを通じて対処してきた能力というものがだんだん減ってきてしまったのではないかというふうに思います。その中小の投資家の人たちも、80年代から90年代にかけて、かなり広東省などにおいては成功を収めていたけれども、彼らが、中国がWTOに加盟をし、また、経済というものがだんだんフォーマル化される中において、こう、スクイズアウトされるとか、締め出されてきたというふうにも思います。

タミー: それでは、11時半となりましたので、セミナーを終えなければならない時間になりました。通訳と、アランに対してお礼申し上げます。後でまた、質問をしていただくことも結構だというふうに思います。あとアランにもちょっと残っていただくことができるかもしれません。皆さん、ありがとうございます。

文献

Smart A. and Fung C.C.K. (in press), *Hong Kong public and squatter housing: Geopolitics and informality, 1963-1985*, Hong Kong University Press.

編集注

発表は英語で行われた。当日逐次通訳された発表内容の翻訳の文責は編集代表にある。